下顎下縁部に発生した周辺性骨腫の1例

杉山 知子・神部 芳則・鹿志村 圭
池田 薫・伊藤 弘人・草間 幹夫

A case of peripheral osteoma arising in the inferior border of the mandible

SUGIYAMA Tomoko・JINBU Yoshinori・KASHIMURA Kei
IKEDA Kaoru・ITOHI Hiroto・KUSAMA Mikio

Abstract: We report a rare case of a peripheral osteoma involving the inferior border of the mandible. The patient was a 59-year-old woman who presented to the hospital because of swelling of the left jaw and facial asymmetry. She had noticed the swelling 13 years earlier. A bone-like mass lesion measuring approximately 35 × 30 mm was observed in the subcutis at the inferior border of the left side of the mandible. Panoramic radiography showed a bone-like mass arising in the inferior border of the left side of the mandible. Computed tomography also showed a well-defined, lobular bone-like lesion with homogeneous density connected to the mandible. The clinical diagnosis was peripheral osteoma. Surgical resection of the lesion was performed extraorally with the patient under general anesthesia, and the histopathological diagnosis was peripheral compact osteoma. No recurrence has been detected postoperatively.

Key words: peripheral osteoma (周辺性骨腫), mandible (下顎骨), compact osteoma (緻密性骨腫)

緒 言

骨腫は骨組織に生じる良性の腫瘍で、緩慢に発育することを特徴とする。口腔領域においてもしばしば遭遇する疾患であり、骨内部に発生する中心性骨腫と骨膜性に発生する周辺性骨腫に大きく分類できる¹⁾。われわれは下顎下縁に発生した周辺性骨腫のまれな1例を経験したので、その概要を報告する。

症 例

患 者: 59歳, 女性。

主 訴: 下顎の腫脹および顔面の非対称。

初 診: 2008年6月。

既往歴: 高血圧症 (40歳), 椎間板ヘルニア (58歳), 両下肢静脈瘤 (59歳)。

家族歴: 特記事項なし。

現病歴: 1995年頃より左側下顎骨下縁部の腫脹に気付いたが、痛みがなかったため放置していた。2000年に某大学附属病院口腔外科にて骨軟骨腫疑いと診断されたが治療は受けずに放置していた。腫脹が徐々に増大してきたため2008年6月に歯科治療で受診した近歯科医院より紹介され、精査、加療目的に当科を受診した。

現 症:

全身所見: 身長 156 cm, 体重 59 kg. 体格, 栄養状態ともに良好で、特に異常は認めなかった。

口腔外所見: 顔貌は左右非対称であり、左側顎角部に骨様の腫瘍を触知し、腫瘍の大きさは約 35 × 30 mm で、皮膚との癒着や圧痛はなく、顔面神経麻痺も認めなかった (写真1)。

口腔内所見: 下顎両側臼歯部に欠損を認め、 $\overline{4}$ 、 $\overline{4}$ 、 $\underline{3}$ には残根を認めた。排膿や出血、歯肉の圧痛などはなく、急性炎症症状は認めなかった。その他に口腔内に異常所見は認めなかった。

X線所見: パノラマX線写真では左側下顎角部前方に骨様のX線不透過像を認めた。内部均一で境界は明瞭であった (写真2)。

CT所見: 左側下顎角前方に下顎骨と連続した 25 × 16

自治医科大学歯科口腔外科学講座
(主任: 草間幹夫教授)

Department of Dentistry, Oral and Maxillofacial Surgery, Jichi
Medical University

(Chief: Prof. KUSAMA Mikio)

受付日: 2010年8月13日

採択日: 2011年6月28日

写真1 初診時の顔貌写真

左側顎角部に骨様腫瘤を触知し、顔貌は左右非対称であった。

写真3 CT像

左側下顎角前方に 25×16 mm の骨様の腫瘤状病変を認めた。

写真2 初診時パノラマX線写真

左側下顎角部前方に骨様のX線不透過像認めた。内部は均一で境界は明瞭であった。

mm の骨様の腫瘤状病変を認めた。腫瘍は分葉状を呈し、内部はほぼ均一で皮質骨と同程度の high density を示した (写真3)。

臨床検査所見：血液検査で明らかな異常所見はなかった。

臨床診断：左側下顎骨周辺性骨腫。

処置および経過：上記臨床診断のもと 2008 年 8 月に全身麻酔下に口外法による腫瘍切除術を施行した。下顎下縁から 1.5 横指下方に頸部皺に沿って切開を加え、広頸筋下まで切離し顔面神経下顎縁枝を確認した。次に顔面動静脈を結紮・切断し、さらに骨膜を開開・剥離して、左側顎角部前方に下顎骨から連続した有茎性の腫瘍本体を明示した。腫瘍基底部分をバーおよび骨ノミを用いて分離し腫瘍を切除した (写真4)。術後、軽度の顔面神経麻痺を認めた。

写真4 術中写真

腫瘍基底部を穿孔し、骨ノミにて分離し、腫瘍を切除した。

写真5 病理組織像

(H-E染色 A:弱拡大 B:中等度拡大)

骨様に硬い結節状の病変で、組織学的には層板構造のみられる成熟した骨組織の増生を認め、緻密骨の領域と一部に線維性間質の増生を伴う海綿骨の領域も認めた。

め、ビタミンB12製剤、ATP製剤を投薬し、術後5か月後には改善した。術後2年1か月経過したが、再発所見を認めることなく経過は良好である。

摘出標本所見：腫瘍の大きさは30×20×13mm、表面は滑沢で白色の凹凸不正な有茎状の骨様組織であった。

病理組織学的所見：病理組織学的には層板構造のみられる成熟した骨組織の増生を認めた。大部分は緻密骨から成り、一部に線維性間質の増生を伴う海綿骨の領域も認められた(写真5)。

病理組織学的診断：周辺性緻密性骨腫。

考 察

骨腫は成熟した骨質の増殖から成り、緩慢な速度で発育する良性の腫瘍である¹⁾。骨の内部に発生し徐々に骨を膨隆させる中心性骨腫と、骨膜側より発生し骨面から突出した腫瘤を形成する周辺性骨腫に分類され、まれに骨より全く遊離して軟組織に発生する傍骨性骨腫もある^{2, 3)}。また組織学的には緻密性骨腫、海綿状骨腫に分類される⁴⁾。

頭部顔面領域の骨腫は必ずしもまれではないが、その多くは頭蓋骨や前頭洞、上顎洞をはじめとする顎顔面骨の洞内、外耳道などに発生しており^{5, 6)}、下顎骨への発生頻度は少ない。また、下顎骨における骨腫の好発部位は、下顎角の内外縁、おとがい部下縁、臼歯舌側などである^{1, 7, 8)}。

今回われわれが渉猟し得た本邦における下顎骨に発生した周辺性骨腫は34例(1984年～2008年)であり^{8～16)}、その内訳は下顎臼歯部13例、下顎下縁部10例、下顎角部4例、および下顎枝4例であった。多くは片側性に生じ、両側性は1例のみであった。骨腫は無痛性発育を示すことから自覚症状を伴うまでかなりの期間を要することが多く、また、X線検査などで偶然発見されるまで何ら症状を伴わない場合もある。そのため本腫瘍の発現時期を確定するのは困難である¹⁷⁾。34例の初診時年齢の平均は45.6歳であり、中年以降に多く認められた。また、男女差は男性12人に対し女性22人と、女性に多くみられた。

原因として、先天性、遺伝性、外傷、外来刺激、慢性炎症などが挙げられているが、いずれも不明な点が多い^{18～23)}。本症例でもその原因については明らかではない。

鑑別すべき疾患としては、Gardner症候群、外骨症、慢性骨髓炎による骨増殖などがある²⁴⁾。本症例においては単発性の骨腫であり、明らかな腫瘤状の病変で骨髓炎の所見も認めなかった。

治療法は基本的に外科的切除^{25～27)}である。今回検索した限りでは本腫瘍切除後の再発例の報告は1例¹³⁾のみで、再発はほとんどないものと考えられるが、緩慢な発育をするという特徴から臨床的・画像的に長期間にわたる経過観察が必要である。

結 語

59歳女性の下顎下縁部に生じた周辺性骨腫の1例を経験したので、若干の文献的考察を含めてその概要を報告した。

謝辞

本症例の病理組織学的所見について、ご教授いただきました神奈川歯科大学顎顔面診断学講座病理学分野 榎木恵一教授に深謝いたします。

引用文献

- 1) 石川梧朗, 秋吉正豊: 口腔病理学Ⅱ. 改訂版, 京都, 1982, 592-593 頁.
- 2) 林 誠一, 川辺良一, 他: 下顎骨に発生した周辺性骨腫の1例. 日口外誌 37: 463-467 1991.
- 3) Woldenberg, Y. and Nash, M.: Peripheral osteoma of the maxillofacial region. Diagnosis and management: a study of 14 cases. Med Oral Pathol Oral Cir Bucal 10: 139-142 2005.
- 4) 貞森平樹, 長畠駿一郎, 他: 下顎臼歯部舌側に発生した周辺性骨腫の1例. 岡山歯誌 5: 117-119 1986.
- 5) Shafer, W.G., Hine, M.K., et al.: A textbook of Oral Pathology. 4th Ed, Saunders, Philadelphia: 163-164 1983.
- 6) Barnes, L., et al.: Surgical Pathology of the Head and Neck. Marcel Dekker, Inc., New York, 1985, p943-944.
- 7) 菊地浩吉, 吉木 敬 編: 新病理学総論. 南山堂, 東京, 1997, 541 頁.
- 8) 渡辺政明, 野谷健一, 他: 下顎下縁部にみられた周辺性骨腫の1例. 日口外誌 45: 199-201 1999.
- 9) 本田雅彦, 寺門正昭, 他: 下顎舌側部にみられた鶏卵大周辺性骨腫の1例. 日口外誌 46: 436-438 2000.
- 10) 福永誠司, 水川展吉, 他: 下顎枝内側にみられた周辺性骨腫の1例. 日口外誌 46: 787-789 2000.
- 11) 竹内良成, 小林明子, 他: 下顎骨下縁部に生じた比較的大きな周辺性骨腫の1例. 日科誌 53: 37-40 2004.
- 12) 鈴木宣充, 辻 司, 他: 下顎下縁に発生した周辺性骨腫の1例. 北海道歯誌 26: 288-292 2005.
- 13) 野村幸恵, 柿澤 卓, 他: 下顎角部に発生し長期間経過後に再発した周辺性骨腫の1例. 日口外誌 46: 87-89 2000.
- 14) 堀之内康文, 篠原正徳, 他: 右下顎骨体部と下顎枝に発生した周辺性骨腫の1例. 日口外誌 45: 706-708 1999.
- 15) 沖村 真, 吉岡秀郎, 他: 嚥下障害を伴った巨大な周辺性下顎骨骨腫の1例. 日口外誌 41: 161-162 1995.
- 16) 沖田美千子, 針谷靖史, 他: 下顎骨に発生した周辺性骨腫の1例. Hospital Dentistry & Oral-Maxillofacial Surgery 20: 57-60 2008.
- 17) White, S. and Pharoah, M.J.: Benign tumor of jaw. In: White, S. and Pharoah, M.J., editors. Oral radiology. Principles and interpretation, 5th Ed, Mosby Co, St Louis, 2004, p410-58.
- 18) Thoma, K.H. and Goldman, H.M.: Oral Pathology, 5th Ed, Mosby Co, St Louis, 1960, p1247-1254.
- 19) Thoma, K.H.: Oral Surgery, 5th Ed, Mosby Co, St Louis, 1969, p969-975.
- 20) Bodener, L. and Gatot, A.: Peripheral osteoma of the mandibular ascending ramus. J Oral Maxillofac Surg 56: 1446-1449 1998.
- 21) Bessho, K. and Murakami, K.: Osteoma in mandibular condyle. Int J Oral Maxillofac Surg 16: 372-375 1987.
- 22) Schneider, L.C. and Dolinsky, H.B.: Solitary peripheral osteoma of the jaws: report of case and review of literature. J Oral Surg 38: 452-455 1980.
- 23) Mancini, J.C., Woltmann, M., et al.: Peripheral osteoma of the mandibular condyle. Int J Oral Maxillofac Surg 34: 92-93 2005.
- 24) Sayan, N.B., Ucok, C., et al.: Peripheral osteoma of the oral and maxillofacial region: a study of 35 new cases. J Oral Maxillofac Surg 60: 1299-1301 2001.
- 25) 増田 卓, 竹内洋介, 他: 旁咽頭腔へ進展した下顎骨骨腫の1症例. 耳喉 58: 279-283 1986.
- 26) Kaplan, I. and Calderon, S.: Peripheral osteoma of the mandible: a study of 10 new cases and analysis of the literature. J Oral Maxillofac Surg 52: 467-70 1994.
- 27) Amit, M. and Nageshwar, I.: Large peripheral osteoma of the mandible. Oral Radiol 24: 39-41 2008.